九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Huck and Racism (In Honour of Professor Fumio Miyahara On the Occasion of His Retirement)

Fujisaki Mutsuo
九州大学言語文化部

https://doi.org/10.15017/1354649

出版情報：英語英文学論叢. 47, pp.65-76, 1997-02. 九州大学英語英文学研究会
バージョン：
権利関係：

ハックとレイシズム

藤　崎　睦　男

ハックがレイシストであるか否かは微妙な問題である。はっきり言えることは，始まりはレイシストであったということである。彼は南北戦争前(Antebellum)のアメリカで南部人として成長し，人種差別を初めとして当時の白人社会の支配的イデオロギーから決して自由ではありえない十四歳の少年であった。同様の社会状況における少年の体験は MarkTwain 自らが『自伝』(*The Autobiography of Mark Twain*) の中で語っている。

> In my schoolboy days I had no aversion to slavery. I was not aware that there was anything wrong about it. No one arraigned it in my hearing; the local papers said nothing against it; the local pulpit taught us that God approved it, that it was a holy thing and that the doubter need only look in the Bible if he wished to settle his mind... [1)]

奴隷制度を疑問視するものが誰一人としておらず，新聞は弁護し，ましてや価値体系の中心たる教会が是認し正当化するような状況下では，レイシストとして成長することはむしろ当然の成り行きであろう。ただハックは孤児同然の浮浪児であるという点がトウェインとは異なる。彼には人格形成の過程における家庭や学校や教会での教育の影響が小さく，そのため偏狭で頑迷な人種差別的イデオロギーの浸透も比較的少なかったことは想像できる。また“sivilize”されることを極度に嫌悪したことを考慮すれば「上品」な社会の制度や価値観にたいして周囲の人々よりも多少は距離を置いて見ることが可能であったかも知れない。このような特殊な事情が彼とジムの心理的距離を近づけたことは否定できないが，基本的には，作者と同様に人種的偏見から完全に自由ではあり得なかった。

筏の上でのジムとの共同生活はハックを人種差別的言説にあふれた社会から隔離し，白人と黒人奴隷の関係から徐々に階級と人種を越えた個と個の関

1) Charles Neider, ed., *The Autobiography of Mark Twain* (New York: Harper, 1959), 6.

係へと二人を導いて行く。ハックはジムの人間的心情の吐露に耳を傾け道徳的に教化される。やがて今まで意識に上らなかった奴隷制白人社会の「良心」(conscience)がジムへの人間的共感によって照射され，二者のせめぎ合いが少年の内部で始まる。この内的葛藤は外部から押し付けられたレイシストのイデオロギー対ハックの内部に生まれた同情心との間の争いとしてとらえることができる。トウェインもノートブックの中でこの作品を"where a sound heart & a deformed conscience come into collision & conscience suffers defeat"[2]と述べていることからも，作者の意図が明確に読者に伝わる部分である。

"a sound heart"と"a deformed conscience"との衝突がはっきりとハックの内部で心理的葛藤という形を取って現れるのが16章である。筏がケーロに接近し自由への期待が高まるにつれジムは興奮し将来の計画を語り出す。ハックはここで初めて逃亡奴隷の手助けをする自分の犯罪性に気付き，「良心」の呵責にさいなまれ，ジムを密告するためにカヌーを漕ぎ出す。結局ぎりぎりのところで奴隷ハンターに嘘をつき密告を止めるが，筏に戻ったハックはいやな気分になり落ち込んでしまう。その理由は以下のように説明される。

> because I knowed very well I had done wrong, and I see it warn't no use for me to try to learn to do right; a boy that don't get *started* right when he's little, ain't got no show—when the pinch comes there ain't nothing to back him up and keep him to his work, and so he gets beat. Then I thought a minute, and says to myself, hold on,—s'pose you'd a done right and give Jim up; would you felt better than what you do now? No, says I, I'd feel bad—I'd feel just the same way I do now. Well, then, says I, what's the use you learning to do right, when it's troublesome to do right and ain't no trouble to do wrong, and the wages is just the same? I was stuck. I couldn't answer that. So I reckoned I wouldn't bother no more about it, but after this always do whichever come handiest at the time. (127-28)[3]

---

2) Steven Mailloux, "Reading *Huckleberry Finn*: The Rhetoric of Performed Ideology" in *New Essays on "Adventures of Huckleberry Finn"*, ed. Louis J. Budd (Cambridge: Cambridge UP, 1985), 131.

3) 作品の引用は，Mark Twain, *Adventures of Huckleberry Finn*, vol. 8 of *The*

ハックはジムの密告を思いとどまったのは間違いだと言い，それは自分の生い立ちのせいだと考える。きちんとした躾と教育を受けていないため最後まで正しい事をやり遂げられない，つまりジムを正当な持ち主に戻すための密告ができず「良心」に恥じない行動が取れなかったという訳である。これはハックには社会化によるイデオロギーの刷り込みが希薄であったため，逃亡奴隷を持ち主に返すという行為を当然のこととして受け入れる程の判断力を持ち合わせていないということをレイシストの立場から述べたものである。つまりこの段階ではハックはまだレイシスト的価値判断から一歩も抜け出してはいないということが分かる。次に彼は今後判断に窮した時は「その時に一番やり易いこと」をやろうと決心する。これは言い換えれば，場合に応じて「良心」に従うか否かを決めるということであり，ハックはこの時初めて今まで無意識のうちに自分の行動の規範となっていた「良心」というものを客観的に認識し，自らの中にある別の規準に従う可能性を示したのである。やがて訪れる「良心」への反旗の心理的な準備が整ったと言えよう。

『ハックルベリー・フィンの冒険』の結末部についての最も有名な批評はおそらく *The Green Hills of Africa* の中で述べられた Hemingway の言葉であろう。

> All modern American literature comes from one book by Mark Twain called *Huckleberry Finn*. If you read it you must stop where the Nigger Jim is stolen from the boys. That is the real end. The rest is just cheating.[4]

作品出版から50年後になされたこの発言は，アメリカを代表するトゥエイン直系の作家のものとして注目を浴び，しばしば引き合いに出されて来たが，同様の批判は1885年の出版当初からなされていたものであり，作品の不道徳性にたいする批判と同じ程度に歴史は古いものであるということを指摘しておこう。[5]多くの批評家にとって結末部は芸術的欠陥として映ったが，それに

Works of Mark Twain, ed. Walter Blair and Victor Fischer (Berkeley: U of California P, 1988) より。引用文末尾の括内数字は頁を示す。

4) Ernest Hemingway, *The Green Hills of Africa* (New York: Scribners, 1935), 22.

5) Victor Fischer, "Huck Finn Reviewed: The Reception of *Huckleberry Finn* in the United States, 1885-97", *American Literary Realism: 1870- 1910*, 16 (1983),

対して政治的倫理性の問題を読み取ろうとしたのがLeo Marxである。テーマ的には，これまで中心を占めていたハックとジムの自由への戦いは最後にトムの「茶番劇」(burlesque)によって台なしにされる。ジムについては，自由の獲得という重大な動機がナンセンスの対象となることで，これまで自由の闘士として成長して来たジムの人間としての尊厳が奪われ再びミンストレルショーの"negro"と言うステレオタイプに戻ってしまう。ハックについては，これも道徳的に成長して来た少年の意味が侵食されてしまう。以上がマークスの結末部批判の論点の要約である。[6)]

確かに既に自由になっているジムを再び自由にするというトムの救出劇は今までのストーリーの流れから逸脱している。特にハックに関しては，直前の31章で「良心」の危機に直面し，ジムを自由にするためならたとえ地獄に落ちてもかまわないと決心するクライマックスを経験した後に，トムの茶番に付き合うのは不合理である。このハックの決心の場面は彼が人間的成長を遂げた場面として度々引用されるが，再検討の余地があろう。まずここに至るまでのハックの行動基準は，既に述べたように「良心」を客観視することでその頚木から離れたことにより，宙づり状態になっているということを確認しておかなければならない。そのような状態で川を下って来たハックはいよいよ「良心」に決断を迫られ，ミス・ワトソンにジムの居場所を知らせる手紙を書く。しかしこれまでの筏のうえでのジムとの生活から得た人間的共感から，"I'll go to hell"と言って手紙を破り捨てる。ストーリーをこのようにたどって行けば，マークスの言うようにハックは道徳的成長を遂げ ジムを単なる物から自分と同じ一人の人間として認めたと考えることは可能である。しかし奴隷制についてのハックの態度は明確ではない。つまりジムを自由にするために地獄へ落ちる決心までもしなければならないということは，奴隷制社会のイデオロギーからいまだ抜け出していないことの証左ではないか。本物のアボリショニストであり，自らの行為に確固たる信念をもっていれば，奴隷の逃亡を助けることで地獄へ落ちるなどとは考えないはずである。他人の奴隷を逃亡させることが盗みとされ，財産を盗むことと同義であるという言説を文脈として決心するから地獄へ落ちることになるのである。作品の舞

1-57; rpt. vol. 2 of *Mark Twain: Critical Assessments*, 4 vols., ed. Stuart Hutchinson (Helm Information, 1993), 156.

6) Leo Marx, "Mr. Eliot, Mr. Trilling, and *Huckleberry Finn*", *The American Scholar*, 22 (1953), 423-40; rpt. vol. 3 of *Critical Assessments*, 280-93.

台となった1840年代の奴隷制社会においては，ハックの行為は道徳的な堕落であり，彼自身もそのような考えから抜け出していない。そしてジムの逃亡を助けようという決断は筏という閉鎖された空間における個人的体験より生じた共感に基づくもので，黒人奴隷全体の姿は視野には入っていない。彼が地獄に落ちることを厭わないのは，あくまでもジムのためである。Leslie Fiedler はアメリカ文学の中に繰り返し現れるパターンとして，自然の中での黒人又はインディアンと白人との間の男同士の友情に注目する。これは白人男性の，女性との関わりで生じる大人としての責任から逃れたいという無意識の願望を表しているのであるが，彼は，ハックはミス・ワトソンという自分を"sivilize"しようとする女性から逃れ，自然の中でジムとの同性愛的な生活をすることにより，上記のパターンを踏襲していると述べる。[7]同性愛の問題に関しては議論の余地があるところだが，少なくともハックとジムの間の友情が個人的なものであり社会性を欠くという主張を裏付けるものである。

ハックが一貫して黒人一般へのレイシスト的偏見を捨てきれてはいないという事実は32章でのサリーおばさんとの会話によって明白になる。ここでは，船が遅れて到着した理由は座礁なのかと聞かれたハックは，おばさんに例のごとくとっさの嘘をつく。

> Now I struck an idea, and fetched it out:
>
> "It warn't the grounding—that didn't keep us back but a little. We blowed out a cylinder-head."
>
> "Good gracious! anybody hurt?"
>
> "No'm. Killed a nigger."
>
> "Well, it's lucky; because sometimes people do get hurt. . . ."(279)

黒人を人間の数に入れていない社会の残忍性が二人の短い会話の中に描き出され，トウェインのアイロニーが見事に効いている場面である。しかし「黒んぼが一人死んだだけ」という言葉を発した時のハックの態度には曖昧さが残る。つまり彼は本心で言ったのかそれとも作者と同じくアイロニカルな発言なのかという問題である。後者を支持する論の一例として David L. Smith を引用してみよう。

---

7) Leslie A. Fiedler, "Come Back to the Raft Ag'in, Huck Honey!", *Partisan Review*, 15 (1948), 269-76; rpt. vol. 3 of *Critical Assessments*, 263-69.

Huck's offhand remark is intended to exploit Aunt Sally's attitudes, not to express Huck's own. A nigger, Aunt Sally confirms, is not a person. Yet this exchange is hilarious, precisely because we know that Huck is playing upon her glib and conventional bigotry. We know that Huck's relationship to Jim has already invalidated for him such obtuse racial notions.[8)]

ジムとの関係によってハックの人種的偏見はなくなっており，したがってハックの言葉は自らの態度の表明ではなくサリーおばさんの差別的態度に付け込んでいるという論旨である。しかしこのような解釈は，マークスと同様に，ハックの道徳的成長と社会的イデオロギーの否定を同列に考える読みに起因すると思われる。前述のように，ハックの人間的共感はあくまでもジム個人に対するものであり，黒人奴隷一般に向けられるような普遍性をもったものではない。第一，見知らぬ土地に一人でやって来て，相手が何者なのかのみならず，自分自身が誰なのか皆目見当がつかない状態で，相手の人種差別的態度に意識的に付け込むなどということは十四才の少年にとっては極めて困難な芸当であろう。結果的にはお互いに差別的言説をやり取りすることで二人は打ち解けることができた。それは初対面の人が当たり障りのない天気を話題にするのと同じことで，むしろ時候の挨拶のごとく発せられた差別的言葉ののさりげなさこそが，社会の病んだ姿を鮮やかに浮かび上がらせているのではないだろうか。そしてそのことがトウェインが意図したものである。ジムの自由への意志に対しては共感を示しながら，その共感を普遍化できないところにハックの限界があり，同時にそれが彼の矛盾した行動の原因となっている。道徳的成長を遂げたはずのハックが，結末部のジム救出劇において トムの言いなりに加担するのは，容易には払拭できないレイシズムに原因がある。ジムに対する人間的共感は筏という閉じられた空間の中でこそ生じたものであり，ハックも再び社会に戻れば，イデオロギー的言説のとびかう中に埋没し，無意識のうちに同じ差別的言辞を発する。ジムの個性も黒人奴隷という大きな差別的範疇の中に解消されてしまう。

Arnold Rampersad は，『ハック』が書かれた時代を考慮しながら，トウェインの意図について次のように指摘している。

8) David L. Smith, "Huck, Jim, and American Racial Discourse", *Mark Twain Journal*, 22 (1984), 4-12; rpt. vol. 3 of *Critical Assessments*, 404.

Mark Twain wrote as a Southerner in a period of intense reaction to blacks; he clearly conceived of his book as, in part, a blow against white reactionary attitudes, against the rising walls of segregation, against lynching, and against the slanderous imputation that blacks were less than human and should therefore be treated with prejudice.[9)]

トウェインが『ハック』を書き始めたのは，1865年から始まる「再建」(Reconstruction)最終段階の1876年，折しも白人優越の復活がまさに決定的となった年である。1940年代奴隷制社会の批判はそのまま作者と同時代のレイシズム批判でもあった。南北戦争後徐々にではあるが進みつつあった黒人の諸権利獲得は南部白人の反発を増大させて行った。この時期の白人の反動的態度は，6章のPapの長広舌の中に書き込まれているが，黒人の投票権についての彼の憤慨の中に表れたレイシズムと再建期の黒人参政権に対する南部白人の反動的言動とのアナロジーは明白である。

それではレイシズムに対する批判という明確な意図を持って書き始めながら，それを最後まで維持できなかった理由は何であろうか。テキスト内部に限って言えば，ハックの完全には払拭できないレイシズムにあることは，今まで詳述して来た。ここでトウェイン自身の黒人奴隷に対する感情を知るためには再び『自伝』に戻る必要がある。トウェインがレイシストとして育たざるを得ない環境にあったことは本論の冒頭で既に述べた。南北戦争を分水嶺にして，次第に変節して行った彼は，しかしながら，『自伝』の中でハンニバルの少年時代を振り返るとき，奴隷制のもとで生活する市民に対してはきわめて寛容である。彼は南部の奴隷市場に船積みされるのを待つ黒人男女の悲しげな姿に強烈な印象を受けるが，奴隷制の持つ残忍性を専ら奴隷商人や南部プランテーションの特性とし，ハンニバル近辺の奴隷制については，穏やかな家庭内奴隷であり，残忍な行為も稀であったと語る。そして当の奴隷については次のように述べている。

...the wise and the good and the holy were unanimous in the conviction that slavery was right, righteous, sacred, the peculiar pet of the Deity

9) Arnold Rampersad, "*Adventures of Huckleberry Finn* and Afro-American Literature", *Mark Twain Journal*, 22 (1984), 47-52; rpt. vol. 3 of *Critical Assessments*, 424.

and a condition which the slave himself ought to be daily and nightly thankful for. Manifestly, training and association can accomplish strange miracles. As a rule our slaves were convinced and content. So doubtless are the far more intelligent slaves of a monarchy; they revere and approve their masters, the monarch and the noble, and recognize no degradation in the fact that they are slaves—slaves with the name blinked, and less respectworthy than were our black ones, if to be a slave by meek consent is baser than to be a slave by compulsion—and doubtless it is.[10)]

ここには奇妙なレトリックが隠されている。最初は，抑圧されている奴隷自身が納得せざるを得なくなるような，権威により制度化された道徳性の批判が行われるかに見えていたものが，やがて奴隷は「満足」していたという作者の私見によって曖昧にされる。さらに旧世界の君主制下の人間は自らの抑圧者を尊敬し奴隷の身分に甘んじているとし，強制的に奴隷にさせられているアメリカの奴隷よりも価値が低いと，相対的にアメリカの奴隷制を評価する結果に終わっている。もちろん自ら積極的に評価する意図はなかったはずであるが，少なくとも無意識のうちに作者の中にある自己弁護の感情がこのように言わせたのであろう。そして，以下のように結論付ける。

It is commonly believed that an infallible effect of slavery was to make such as lived in its midst hard-hearted. I think it had no such effect—speaking in general terms. I think it stupefied everybody's humanity as regarded the slave, but stopped there. There were no hard-hearted people in our town—I mean there were no more than would be found in any other town of the same size in any other country; and in my experience hard-hearted people are very rare everywhere.[11)]

非人間的な奴隷制度の下でも冷酷な人間は生まれないと自らの感想を述べ，さらに彼の経験によるとどこであれ冷酷な人間はまれである，と人間性の一般化をしてしまう。こうなると作者が最初に意図したはずの奴隷制への批判

10) Neider, 30.
11) Neider, 31.

は単なる私的な憤慨となり，黒人奴隷に対する憐憫も個人的な同情の域を出なくなる。

トウェインにとって子供時代の回顧とはアンビヴァレンスに支配されたものであった。フィドラーは的確に指摘する。

> The Civil War is the watershed in Twain's life between innocence and experience, childhood and manhood, joy and pain; but it is politically, of course, the dividing line between slavery and freedom. And Twain, who cannot deny either aspect, endures the contradiction of searching for a lost happiness he knows was sustained by an institution he is forced to recognize as his country's greatest shame. It was the best he could dream: to be free as a boy in a world of slavery![12]

ノスタルジアに彩られた至福の少年時代は，アメリカ最大の恥辱である奴隷制に支えられた世界であった。『トム・ソーヤーの冒険』を書き『ハック』を書いたかっての南部人にとって，奴隷制を否定することは，少年時代の思い出につながるすべてを否定することになる。彼が奴隷制批判を行う時，自らが生まれ育ったハンニバルの白人社会の弁護が見え隠れするのは，少年時代を肯定的に回顧しようとするためであり，その結果奴隷制は悪だが，ハンニバルの奴隷はそれほど不幸ではなかったというレトリックが全体を支配する。

ハックはジムに対する偏見は消えても，奴隷制自体を否定するまでには至らなかった。ハックというペルソナを通して語るレイシズム批判の物語も，作者自身の少年時代に対するアンビヴァレンスが，ハックのこのような態度の曖昧さを生み，結果的に不徹底のまま終わってしまったのである。トウェインはジムをステレオタイプから解放し一個の人間としての生命を与えたが，結末部においてジムを再びステレオタイプに戻してしまった，とマークスは批判した。この批判は，ジムの見張役の黒人奴隷ナットをステレオタイプに押し込めてしまう実際の描写によっても裏付けられる。

> This nigger had a good-natured chuckleheaded face, and his wool was all tied up in little bunches with thread. That was to keep witches

12) Fiedler, "As Free as Any Cretur...", *New Republic*, 133 (1955), 17-18; rpt. vol. 3 of *Critical Assessments*, 492.

off. He said the witches was pestering him awful, these nights, and making him see all kinds of strange things, and hear all kinds of strange words and noises, and he didn't believe he was ever witched so long, before, in his life. He got so worked up, and got to running on so, about his troubles, he forgot all about what he'd been agoing to do.(295)

お人よしで，間抜けで，迷信深いこの黒人は，物語の最初に登場するジムそのものである。ジムをミンストレル・ショー的ステレオタイプに描くことは，しだいに明らかになる彼の人間性との間の落差によって，アイロニーとして時代の偏見に対する批判となり得たというのが従来の解釈である。しかしナットの描写にはそのような効果はない。ナットの描写に関してはトウェインもハックと同じく，ジム以外の一般の黒人奴隷に対する偏見から脱し得ていない。

Ralph Ellison はミンストレル・ショー的ステレオタイプに描かれるジムが黒人読者にはどのように受け取られるかについて述べている。

...It is not at all odd that this black-faced figure of white fun is for Negroes a symbol of everything they rejected in the white man's thinking about race, in themselves and in their own group. When he appears, for example, in the guise of Nigger Jim, the Negro is made uncomfortable. Writing at a time when the blackfaced minstrel was still popular, and shortly after a war which left even the abolitionists weary of those problems associated with the Negro, Twain fitted Jim into the outlines of the minstrel tradition, and it is from behind this stereotype mask that we see Jim's dignity and human capacity—and Twain's complexity—emerge. Yet it is his source in this same tradition which creates that ambivalence between his identification as an adult and parent and his 'boyish' naïveté, and which by contrast makes Huck, with his street-sparrow sophistication, seem more adult. Certainly it upsets a Negro reader,...[13]

この文の中には，今日ジムの描写について論議されている問題点が明確に提

13) Ralph Ellison, "Change the Joke and Slip the Yoke", *Partisan Review*, 25 (1958), 212-22; rpt. vol. 2 of *Critical Assessments*, 379.

示されている。トウェインはジムをステレオタイプの枠にはめ込んだが，やがてその枠を越えて人間的尊厳と能力を備えた人物像が現れてくる，とエリスンは一応の教科書的評価を下すが，同時にそのステレオタイプが黒人読者を不快にさせ，ジムが引き受けた大人とも子供とも言えない性格が，いやむしろハックに比較して幼稚に見える姿が，気分を害させると述べる。エリスンは控えめな表現を用いているが，ここで述べられていることは，ミンストレル・ショー的ステレオタイプとして現れるジムが黒人読者にとっては人種的偏見に満ちた黒人像以外の何物でもないという紛れもない事実であろう。公民権運動や人種差別廃止運動の結果，白人のみで構成されていた教室の中に黒人の子供が交じり始めると，『ハック』は新しい読み手を視野に入れた読者からの厳しい批判にさらされ始めた。特に中等教育に携わる人々の問題にする所は，教室で黒人の子供達が"nigger"という言葉やジムのステレオタイプから受けるショックの大きさである。そこにはアメリカのレイシズムの歴史が彼らの心に喚起する屈辱のみならず現在にも残る差別が濃く影を落としているのであるが，彼らにとっては『ハック』は古典ではなく人種的偏見に満ちた「くず」(trash) にすぎないのである。[14]このような批判に対しては，トウェイン特有のアイロニーや皮肉を持ち出しての反論がなされる。しかしそのような反論が時として説得力に欠けるのは，ハックのジムにたいする態度の曖昧さや，作者自身がレイシズム批判を作品の中で徹底できずにいる状況にこそ原因があるといえよう。

14) cf. John H. Wallace, "*Huckleberry Finn* is Offensive", *Washington Post*, 11 April 1982; rpt. vol. 3 of *Critical Assessments*, 399-401. Peaches Henry, "The Struggle for Tolerance: Race and Censorship in *Huckleberry Finn*", in *Satire or Evasion?: Black Perspectives on "Huckleberry Finn"*, ed. James S. Leonard et al. (Durham: Duke UP, 1992), 25-48.